**「葛城」について**

**１．地名としての葛城**

金剛山葛城山東麓は元々尾張族の支配地で**高尾張邑**ﾀｶｵﾊﾞﾘﾑﾗと呼ばれていた。

神武天皇が大和を平定した時、最後まで執拗に抵抗した尾張族の土蜘蛛を制圧するのに

「**日本書紀巻第三神武天皇**」に　神武は「葛ｶﾂﾗの網を作って覆いかぶせて捕らえてこれを殺した。

そこで**その邑を改めて葛城**とした」と記されている。

葛城の範囲は当初はこのようなものであったが、金剛山を中心に友ヶ島，和泉山脈、金剛山、葛城山、二上山から亀の瀬にかけて役行者(635~703)が二十八か所に経塚を作り、後に**葛城修験道**が

発展したことでこの範囲が葛城と呼ばれるようになった。

**葛嶺雑記**(1850年)には次のように出ていてその範囲が理解できる。

かつらきは大和のくにに限るにあらず　このみねは東南に紀の川のながれをしき

西南は友かしま　西北は海浜の山際をかぎり　東北は石川のながれをさかへ

大和側の落合よりその水上にいたりては亀瀬といへる所にをわる惣じて紀泉河和の

四か国に跨りて　行程二十八里が間の惣名なり

葛城の地名はこのエリアで広範囲に分布し市、町の名にもなっている。

**２．葛城襲津彦を本宗とする家系**（皇別　皇室の子孫）天皇名の後ろの数字は**代**

葛城王朝　神武1・綏靖2・安寧・懿徳・孝昭・孝安・孝霊・孝元8・開化９の9代

孝元8の第三子彦太忍信命ﾋｺﾌﾄｵｼﾏｺﾄﾉﾐｺﾄだけが葛城王朝直系の血を引く者として残り、その孫

武内宿祢は、葛城王朝を倒して立ち上がった大和朝廷のもとで12代から16代までの五帝に仕え

るなど、活躍した。武内宿祢の権威と名声でその子が**葛城襲津彦**ｶﾂﾗｷﾞｿﾂﾋｺとして**葛城の姓を名乗**ることを許された。襲津彦も神功皇后のもとで武将として華々しい活躍をした。

しかし襲津彦から3代後の円大臣ﾂﾌﾞﾗﾉｵｵｵﾐが雄略天皇に殺されたことで葛城氏は大きく衰えた。

**３．劔根を祖とする葛城氏**（神別＝天孫、天神，地祇ｸﾆﾂｶﾐの子孫）

神武が初代天皇として即位した翌年、論功行賞をして大和平定に功労顕著な7人に賞を与えた。その中で古くから金剛葛城の東麓に住む部族尾張族の**剣根命**ﾂﾙｷﾞﾈﾉﾐｺﾄには、葛城国造ｸﾆﾉﾐﾔﾂｺ

として葛城の地を与えられ**葛城氏の祖**となった。

尾張氏の系譜では葛城（葛木）をその名に冠したものが多い。葛木忌寸、葛木　直，荒田　直、

葛木出石姫、葛城尾治置姫等で「高御魂命ﾀｶﾐﾑｽﾋﾞﾉﾐｺﾄの五世孫の劔根命」を祖としている。

神別の葛城も、次のような理由で高皇産霊尊（高天彦神社の祭神）に遡り、祖神として高皇産霊神を祀るということで皇別の葛城と共通点がある。

**神武を遡る五代の系譜**　高皇産麗尊ﾀｶﾐﾑｽﾋﾞﾉﾐｺﾄ→天忍穂耳尊ｱﾒﾉｵｼﾎﾐﾐﾉﾐｺﾄ→瓊瓊杵尊

ﾆﾆｷﾞﾉﾐｺﾄ→彦火火出見尊ﾋｺﾎﾎﾃﾞﾐﾉﾐｺﾄ→鸕玆+鳥草葺不合尊ｳｶﾞﾔﾌｷｱｴｽﾞﾉﾐｺﾄ→神武天皇

瓊瓊杵尊の（日本書記神代下本文では）三つ子の第三子**火明命**ﾎﾉｱｶﾘﾉﾐｺﾄ（彦火火出見尊

は第二子）を父として天道日女命ｱﾒﾉﾐﾁﾋﾒとの間に生まれた天香山命ｱﾒﾉｶｺﾞﾔﾏﾉﾐｺが尾張族の

始祖となった（**新撰姓氏録ｼｮｳｼﾞﾛｸで神別天孫**の条。京，畿内の1182氏の出自を解説　814年）。

参考までに御炊屋姫ﾐｶｼｷﾔﾋﾒとの間に生まれた宇摩志麻治命ｳﾏｼﾏｼﾞﾉﾐｺﾄが物部氏の祖。

(以上　鳥越憲三郎著「神々と天皇の間」、井上光貞監訳「日本書記　上」より)

**４．金剛山頂の葛城家**

「金剛山頂葛城家系譜略」によると系譜初代の天神立命ｱﾒﾉｶﾝﾀﾃﾉﾓｺﾄ（別名八咫烏命ﾔﾀｶﾞﾗｽﾉ

ﾐｺﾄ・鴨族で神武の論功行賞対象者）から現宮司葛城　裕氏で134代目　８代葛木直高木彦命、

13代葛木直豊静等葛城名の記載例が多い。系譜3代目劔根命は神別の葛城氏の祖。

P1